

2026 年 2 月 9 日
一般財団法人化学及血清療法研究所

第 7 回『太田原豊一賞』受賞者が決定しました

一般財団法人 化学及血清療法研究所（理事長：馬場秀夫、所在地：熊本市中央区）は、第 7 回『太田原豊一賞』の受賞者を決定いたしましたので、お知らせいたします。

受賞者には、賞状、トロフィーのほか、副賞 1,000 万円が贈られます。

太田原豊一賞は、感染症領域および血液領域を中心に顕著な功績を上げられた研究者に対して、当財団の創業者である太田原豊一の名前を冠した『太田原豊一賞』を授与、顕彰することにより、「広く公衆衛生の進歩を図り、兼ねて自然科学の昂揚に資する」という当財団の使命を果たす事業の一環として取り組んでおります。

記

飯田 哲也（いいだ てつや）先生

大阪大学微生物病研究所 所長

細菌感染分野 教授

受賞研究テーマ：腸炎ビブリオの病原性発現機構に関する研究

山本 雅裕（やまもと まさひろ）先生

大阪大学微生物病研究所 感染病態分野 教授

受賞研究テーマ：宿主－病原体・腫瘍相互作用の免疫学的解明と革新的解析技術の開発



飯田 哲也 先生



山本 雅裕 先生

受賞者の研究テーマおよびご略歴

飯田 哲也（いいだ てつや）先生

受賞研究テーマ：腸炎ビブリオの病原性発現機構に関する研究

飯田哲也先生は、ビブリオ属細菌のゲノムと病原性に関する先駆的研究を展開してこられました。ビブリオ属細菌は海洋に広く棲息するグラム陰性桿菌で、コレラ菌や腸炎ビブリオといった重要なヒト病原細菌が含まれます。

飯田先生の最も顕著な業績の一つは、腸炎ビブリオの染色体地図作成過程において、本菌のゲノムが2つの環状染色体から構成されることを世界で初めて明らかにされた点です。さらに、この2染色体構造がコレラ菌をはじめとするビブリオ属細菌全体に共通する性状であることを実証されました。細菌ゲノムは1つの環状染色体から成るという従来の常識を覆したこの発見は、細菌学に大きなパラダイムシフトをもたらしました。

その後、腸炎ビブリオゲノムプロジェクトのリーダーとして全ゲノム配列決定に貢献し、世界に先駆けて報告されました。ゲノム解析により本菌が3型分泌装置遺伝子群を保有することを見出し、遺伝子破壊株を用いた実験でこの装置が病原性に重要な役割を果たすことを実証されました。これはビブリオ属細菌における3型分泌装置のヒト病原性への関与を示した初めての報告となりました。さらに飯田先生は、3型分泌装置から分泌されるエフェクター蛋白質、構成蛋白質群、発現制御蛋白質等を系統的に同定し、この装置に関わる分子群のほぼ全容を解明されました。特に、細胞毒性に主要な役割を果たすエフェクター蛋白質 VepA と下痢原性に関与する VopV をそれぞれ同定し、その作用機序を明らかにされました。

また、多様な腸炎ビブリオ菌株の遺伝子レパートリ解析を通じて、ヒト病原性腸炎ビブリオの進化過程を解明するとともに、3型分泌装置遺伝子群が水平伝達により種を超えてコレラ菌等の他のビブリオ属菌にも伝播していることを明らかにされました。さらに、腸炎ビブリオのパンデミック株に特異的に存在するバクテリオファージ f237 を見出し、本ファージが保有する ORF8 がパンデミック株の識別マーカーになることを示されました。また、次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析による病原体検出法を開発し、ヒト臨床検体からの起病細菌の検出を世界に先駆けて報告されています。

このように飯田哲也先生のご研究は、概念的にも方法論的にも細菌学分野に新風を吹き込むものであり、感染症学および生命科学・医学分野の学術研究への多大な貢献が高く評価され、今回の受賞につながりました。

略歴：

学歴

1984 年	京都大学理学部 卒業
1991 年	大阪大学大学院医学研究科博士課程修了 医学博士取得

職歴

1991 年	日本学術振興会特別研究員
1992 年	大阪大学微生物病研究所 助手
1998 年	大阪大学微生物病研究所 助教授
2005 年	大阪大学微生物病研究所 感染症国際研究センター 特任教授
2010 年-現在	大阪大学微生物病研究所 感染症メタゲノム研究分野（兼任）
2012 年-現在	大阪大学微生物病研究所 病原微生物資源室長（兼任）
2015 年-現在	大阪大学微生物病研究所 細菌感染分野 教授
2016 年-現在	大阪大学微生物病研究所 感染症国際研究センター長（兼任）
2017 年-2019 年	大阪大学微生物病研究所 ゲノム解析室長（兼任）
2019 年-2023 年	大阪大学微生物病研究所 副所長
2020 年-現在	大阪大学微生物病研究所 タイ拠点長（兼任）
2022 年-現在	大阪大学ワクチン開発拠点 拠点長補佐（兼任）
2024 年-現在	日本細菌学会 理事長
2025 年-現在	大阪大学感染症総合教育研究拠点 感染症・生体防御研究部門副部門長（兼任）
2025 年-現在	大阪大学微生物病研究所 所長

受賞歴

1997 年	日本感染症学会 北里柴三郎記念学術奨励賞
2003 年	日本細菌学会 小林六造記念賞
2019 年	第 62 回野口英世記念医学賞

山本 雅裕（やまもと まさひろ）先生

受賞研究テーマ：

宿主－病原体・腫瘍相互作用の免疫学的解明と革新的解析技術の開発

山本雅裕先生は、病原性の細胞内寄生原虫であるトキソプラズマを対象とした宿主免疫応答の研究から出発し、近年は抗腫瘍防御機構へと研究を発展させ、世界的な医生物学者として活躍されています。

山本先生の代表的業績の一つは、インターフェロン誘導性 GTPase 群がトキソプラズマの寄生胞膜を破壊する分子メカニズムを明らかにした研究です。この研究における「オートファジー必須分子の非オートファジー免疫機能」という常識を覆す発見は、世界の研究潮流を変える大ブレイクスルーとなりました。

山本先生は宿主の免疫応答の解明のみならず、病原体側の病原性機構の解析も遂行されています。トキソプラズマやマラリア原虫が宿主免疫を回避する分子戦略を解明し、宿主－病原体相互作用の双方を深く理解する稀有な「二刀流」研究者として国際的に高く評価されています。

また、日本のトキソプラズマ集団が世界的に特異であることを明らかにし、特に沖縄における強毒株出現の分子基盤を提唱されました。これは日本発の寄生虫学研究として世界に大きなインパクトを与え、日本寄生虫学のプレゼンスを高める重要な成果となっています。

さらに山本先生は、原虫感染細胞とがん細胞に対する免疫応答が「I 型免疫応答を基盤とする非自己認識」という点で共通することに着目し、腫瘍免疫学の分野へと研究を展開されました。腫瘍においてマクロファージの操作による制御性 T 細胞を介した新規免疫抑制機構を明らかにし、腫瘍免疫学における大きな概念的ブレイクスルーを成し遂げられました。

これらの目覚ましい業績を支えているのが、先生が独自に開発された革新的技術の三本柱です。第一の in vivo CRISPR screen 法は、生体内におけるトキソプラズマ遺伝子の機能を網羅的に解析し、重要な病原性因子を抽出することを可能にしました。第二の VeDTR マウスシステムは、腫瘍や感染組織あるいは自己免疫組織内に存在する特定の免疫細胞集団を自在に操作できる革命的基盤技術です。第三の POPSICLE は、集団遺伝学解析を革新するバイオインフォマティクス手法であり、日本のトキソプラズマ原虫の特殊性や沖縄における超強毒株出現メカニズムの解明に中心的役割を果たしました。

このように山本先生は、宿主－病原体間および宿主－腫瘍間の免疫学的相互作用研究、そして革新的技術開発の三領域で世界をリードし続けており、日本の学術レベル、世界の学術の向上へ大きく貢献されました。日本の寄生虫学分野にとどまらず感染症学および生命科学・医学分野における卓越した研究業績と、今後のさらなる研究発展が大きく期待されることから、今回の受賞となりました。

ご略歴：

学歴

2001 年	東京大学理学部生物学科 卒業
2006 年	大阪大学大学院医学系研究科 博士課程修了 博士（医学）取得

職歴

2006 年	日本学術振興会 特別研究員(PD)
2006 年	大阪大学大学院医学系研究科 免疫制御学分野 助手
2007 年	大阪大学大学院医学系研究科 免疫制御学分野 助教
2010 年	大阪大学大学院医学系研究科 免疫制御学分野 准教授
2012 年	大阪大学微生物病研究所 感染病態分野 独立准教授
2013 年-現在	大阪大学微生物病研究所 感染病態分野 教授
2018 年	大阪大学荣誉教授の称号を付与

受賞歴

2018 年	国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED) 第 2 回日本医療研究開発大賞 AMED 理事長賞受賞
2019 年	独立行政法人日本学術振興会 第 15 回日本学術興会賞
2020 年	日本寄生虫学会 第 67 回小泉賞
2020 年	日本微生物学連盟 野本賞
2022 年	公益財団法人黒住医学研究振興財団 第 58 回小島三郎記念文化賞
2025 年	日本免疫学会 第 28 回 日本免疫学会賞

以上